スーベニア

こうこ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
スーベニア

【Ｎコード】
Ｎ０８５７Ｚ

【作者名】
こうこ

【あらすじ】

わたしからあなたへ
あなたからわたしへ
わたしからわたしへ
あなたからあなたへ

飛び出す絵本

空の上には痛みなんて無いのだと思っていた
土の中には悲しみなんて無いのだと思っていた

犬の形をしたキャラメルと
キャラメル色をした犬と
私はどちらを踏んだのだっけ

遠いあの日
喜びを履いた心は踊り出し
そのまま何処かへ行ってしまったのだ

黄色いハンカチを持って幸福を捨てに行く途中
絶望を知り希望を知った

ハンカチを捨てて
それからもう一度拾って帰った

コウノトリが運んできたのは新しい命ではなく
息絶えたあの日の私だった

私は土に悲しみを埋め
そして空に痛みを放ったのだった

溜め込んでいたキャンディの包み紙(とっておきの)をぶわりと撒き散らして
私はまた

新しい喜びを産む

今度は一緒に
踊れるように

%

縮こまる世界の
窮屈さに順応していたよ
いつの間にか

拡大したら貴方の顔
余計にぼやけてしまって

頭の中画質悪くて
使いづらい

幸福は
怖いもので
あぁ
だとしたら
怖いものは
幸福で

ろくに機能しないのに
まるで計算したみたいにサラサラ零れていくから

くだらない事ばかり詰まった体は
風船一つで飛べそうで

忘れてしまった記憶はきっと
こんな夜の日の
出来事なんだろう

広がらない空間の
曖昧さに執着していたよ
長い間ね

もう少し縮めてみたら
貴方の顔
思い出せそうなんだけど
小さすぎて
見えないじゃない

磨り減ってく
口数の少なさを

今日は笑って
許してよ

シフト

ノイズだけで構成された音楽を耳に詰め込み
モノローグばかり綴った物語を片手に電車に揺られる

助走している内に終わってしまった競技と
握り締められたまま投げられる事のなかったタオル

空までは決して届かない樹木と
ぶら下がったまま使われる事のなかったロープ

幾つも点在する
終着点

温められる事で
孵化する命
土の中で瞬間を待つ命

ジャンクフードで形成された体はネクタイを拒む

スーパーで卵を買っては温め、温めては腐らない内に食べる

食卓にはヘビーローテーションされる卵料理と『いただきます』

その影で長い間順番を待つ『ごちそうさま』

足跡のつかないアスファルトに君を探して
出遅れた足は一週間前をひた走る

背表紙を突き抜けて
終着駅で始発を待つ

懐古の繭

めっきり大人しくなった携帯電話が
「接続できません」
「接続できません」
ばかりを繰り返すようになった

辺りは近未来的な風貌で
うんと高い建物が空を近くみせている

とまっていたのだ
携帯電話と、
それから、私の世界が

その外の世界は着々と動き
機械の犬は分解され、また生まれ変わっていた

とりあえず三百二十円を持って
コンビニ（らしきもの）で煙草を一箱買おうとしたら
「足りません千円です」とか言われた

どこからか
サイレンにも似た
賛美歌にも似た
断末魔にも似た、
やっぱりサイレンに似た音が
こちらに近づいてくる

何処かへ逃げようとしたけれど
名前のついてない土地などもう何処にもないのだった

私はもうすぐ
撃ち殺されるだろう

一日

隣のお爺さんの神々しい頭を
朝日に見立てる事から私の朝は始まる

恋人は、言うことをきかない犬の散歩をするような足取りで
昨日の空を見にいってしまった

追いかける事もせず
時計を気にしながら化粧をする
私は間違っていないだろう？
鏡に問うてみるが返事はない
間違ってはいないが正しくもないのかもしれない

本当は追いかけたいのだと足が駄々をこね始める前に
あの電車に乗らなければ

いつまでも慣れないパンプスに振り回される私はさぞかし滑稽にちがいない

上司の危うい毛髪が
後輩の甲高い声が
社員食堂の月見うどんが
私の周りを旋回し
鴉が頭上を三度舞ったところで日が暮れる

脅えるものか
脅えるものか

家に帰ると、いつの間にか戻ってきていた恋人がタオルケットをミルクに浸していた
そして「さあ眠ろう」と誘う

ぐしゃぐしゃに丸めたタオルケットを抱え込んで今日を保つ
明日のために
昨日を蔑ろにしないために

開け放した窓からざっざっと足音が響く
向かいの山下さんがウォーキングに出掛ける時間だ

山下さんは履き潰したスニーカーの靴紐だけを時々かえる

それを人生に見立てる事で
私の一日は終わっていく

たね

彼が種になったので
土をうんと柔らかくして庭に植えた
やがて芽が出てから
何十年もかけて
それが木になり
彼が生った時にはもう
私はしわしわのお婆さんだった

彼がぼとりと地に落ちた
今度は私が種になるのだ
そして
熟した頃にはまた、

レモンで色止めされた世界で
何かを違えたまま
何十年も
繰り返し
繰り返し
繰り返し

いつかどちらかが
植えることをやめてしまうだろうか
それとも
鳥に託すだろうか
海に投げるだろうか

糖度の高い果実のようなあなたを

私はいつまでかじらずにいられるのだろうか

きえぎえ

こすれて消えてしまいそうだった君を
ボールペンでなぞって安心したのも束の間
君は泣き止むどころかさらに酷く泣き出した

何度でも手間でも
その都度鉛筆でなぞって欲しかったのだと言った

＊

いなくなりたい
ねむりつづけたい
たいたいたい、と
つよくつよくねんじ

よけいに
いのちのほのおを
ごうごう
もやしたりしていました

はたと
きづいたしゅんかん
ぜんしんの
ちからがぬけて
おもわず
わらってしまいました

＊

書いては消し
書いては消し
手紙を書き直してばかりいたら
消しても消えなくなって
文字の跡がうっすらと残るようになった

使いものにならなくなった便箋の上
混ざり混ざった文字達は知らない言語になって

伝わらないまま
静かに燃えて

暗黙の下で

帰る場所も無いので
一日の大半は電車に揺られています

景色が引き伸ばされるので
座席には後ろ向きに座るのが好きです

スポットライトは見当たらないので
行きつけの寂れた街灯の下へ向かいます

夜に紛れてちらほらと
今日も順番待ちをしている人達がいて
皆思い思いに“得意なもの”を披露していきます

順番がくると僕はひしゃげたビニール傘を片手に
いつものチャップリンを演じました

空気はしんと冷たく
無言の喝采だけが響き渡ります

此処は僕の知りうるどの場所よりも
貴重な場所なのだと思いました

朝日が昇り始めるので
人々はそれぞれの日常へと溶け込んでいきます

そして僕はまた

電車に揺られるのです

マッチ棒が必要だ

夜、幼いジョンとブライアンは家出の計画を練っている
夜、猫達は集会を開き暖かく過ごせる場所は何処かと情報交換に余念がない

三日前に片割れを亡くしたブーツはその半身で一人冬を持て余して泣いていた
彼の部屋では手のひらみたいな葉っぱがむくむくと育っている
私は気化していく悲しみを鼻から吸い込んでいる
二人、一つのカップにおさまってゆらぐ
隔てているのは皮膚だけではないと思い知るために

夜は彼を小さくみせる
夜は私を素直にさせる
話す事など何もないのだ

朝、少年達は少し大人のふりをした
朝、猫達は賢く生き延びている
ブーツは冬眠し始めていて、火照りすぎたケトルが焦れたように鳴きだし沈黙を破る

私は泡になって
コーヒーに浮かんだ
それはほんの少しだけ彼の朝を彩ったようだった

無題

蟻は目次の横でぺしゃりと潰れ本の一部になりたがり
するりと舞い込んだ落ち葉は壁に張り付き飾られたがった
（私は、私は、）
野良猫は虎の背に焦がれ絨毯になりたがり
毛布はどうにもくるまれたがった
（私は、私は、）
踊りながら
私は一つ一つに題名をつけて回った
時には悲観しながら
（嗚呼嗚呼
きっと君はとても素敵なものを見たんだね）

手のひらをじっと見つめていると
頭と体とが離れてゆく
どこか遠い所
あるいはうんと近いのかもしれない
何にもなれなかった
かと言って何にでもなれるわけでもなかった
（私は私につける題名が無い）

バラバラと雨が降り出す
バラバラとジグソーパズルになる

ピカピカに浴槽を磨き上げた後のような感覚
（そして気付く
私だけが汚れている事と石鹸を買い忘れた事に）

バラバラと雨に混ざって私が消えたのか
バラバラと私に混ざって雨が消えたのか
それは最後までわからなかった

都会の隈さん

（羊が１匹羊が２匹数えていたら、３匹目の羊が転けて４、５、６
と次々転けて、もこもこ重なり雲になって帰ってこなくなった

それきり羊は数えていない）

ある日都会の片隅で隈さんに出会いました
隈さんはお逃げなさいと言ったりお待ちなさいと言ったり
天の邪鬼な素振りを見せて翻弄した挙げ句、何だかんだで結局は家
までついてきました
隈さんは少し躊躇しながら
これ落としましたよ、と昔僕が捨てた筈のボールペンを差し出した
のです

ボールペンは出世したらしく万年筆になっていて、何とも迷惑そう
な顔をしています
とりあえず二人を家の中へ招き入れはしたもののお茶菓子が無かっ
た事に気付き、僕はお茶に添えて小話を一つ披露しました
しかしすぐさま万年筆に酷評されてしまい、僕はすっかり打ちひし
がれてしまったのだけれど
飴玉をくれたのであっという間に忘れてしまいました

万年筆には帰る処があるらしく、お茶を一口飲んだ後そそくさと帰
って行きました
隈さんには帰る処がないらしく、二杯目のお茶を飲み終えるといつ
の間にか僕の目の下に住み着いてしまったのでした

外ではいつも圧力をかけられている僕は、家に帰ると豚肉に圧力をかけるのが日課です
すると美味しい角煮が出来上がるのです
（仄かに革命の匂いを放ちながら）

大抵の豚はくたくたになって「もうどうにでもしてくれ」と言うのだけれど、時折「こんなものには屈しないぞ」と言うものもいるのでそんな時僕の胸は少し軋んだりするのでした

窓の外では雲がもくもくと集まりだし、雨を降らせる準備をしています
ところが雨が降り出すかと思いきや、あちらこちらの空からは雲が羊になってぽろぽろと落ちてきていたのです

（僕は脳みそを広げると羊を拾い集める為に旅立って行った、隈さんと共に
それきり僕は帰ってこない）

かけおちごっこ

風にしかきこえない
そんな小さな
約束を交わした
わたしは少し大きい
ママのワンピースを
着てゆく
あなたは一箱
お父さんのマッチを
くすねてくる
他には何も持たなかった
荷物は
少ない方がいいもの

指と指を絡めて
丘を駆け
鳥のまねをして
木の枝をかき集めたら
地面に巣を作る

ワンピースで
あなたを包んで夜を待って
眠る前に
マッチを一本すって
互いの顔を確認したら
あとはただ眠って
朝を待ち
家へ帰るだけ

こんな事を
かれこれもう
百回以上
繰り返している

今しか出来ない約束は
絶えず
わたし達を突き動かし
失望させるのだ

因果

蛇口をひねると
でろり、
液状の祖母が流れてきた

私は目をかたく瞑り
そそくさと手を洗う
洗い終えた手は
何だか前より汚れている気がした

洗濯機をあけると祖母
冷蔵庫をあけても祖母
浴槽に戸棚に祖母

父の手土産は祖母
真夜中のＣＭも祖母

本の最終ページに
観葉植物の葉の裏側にも祖母祖母！祖母！！
私を、削いでゆく！

憎んだものは
愛したものよりずっと
強く残り続けるのかもしれない
それでも、私は、

ゴミ箱から
桃の匂いがする
昨晩食べた残骸だろう
恐らくそこにも

祖母は未だ
家のどこにも
ひそんでいる

エイプリル

一月
一段とざわついているテレビ欄と白い猫がじゃれている
幸福を飲み込んだのか
怠惰を飲み込んだのか
その後ろ姿は鏡餅のようにふっくらと肥えて

二月
尿の温かさだけを
頼りに生きた

三月
新玉ねぎの潔い白さに
嫉妬した

四月
もう随分と春の顔を見ていない

いつも僕を騙していたあの人は
冬の間大事に飼っていた脇の毛を
そろそろ刈り始めている頃だろう

幼い姉弟が何らかの芽を持ってうろうろしている
しばらくしたら新しい名前をつけるに違いない
それはきっと、この先僕がもう、見つけることの出来ないものだ

肩で風を集めるようにしてぐるぐる歩く
南風になる準備はとうに出来ているけれど
春はまた顔も見せずにノックだけして過ぎ去っていく

鎖

ベンチの上で固まり続ける
やがて風化し僅かな隙間をサラサラとこぼれ落ち
その下で丸くなって眠る真っ白い猫になる

民家を探し縁側に佇み続け固まると
ボーリングのピンになり倒され起こされ果ては壊れて山積みになる

その中から選ばれ自由の女神（勿論レプリカ）のたいまつになり
なんとか明かりを灯そうと力んでみるが灯らず

結果、収縮加工され女神型百円ライターになり
偽物とも本物ともわからない炎を放つ

使い古された後分別に困った女に投げ捨てられ
下校中の小学生に散々蹴りとばされ
道すがら収集家の男に拾われ綺麗に磨かれて夕日の見える窓辺に並べられる

やがて埃を被り始めると
故郷が日本だったかアメリカだったかもわからなくなり
段ボールに無造作に詰められ押し入れにしまわれる

数年後、男の孫娘の手に渡りブンブン振り回され遊ばれた挙げ句
テーブルの角にぶつかってポッキリ折れ女神と離れ離れ
庭に転がり蟻に運ばれるも折角なのでソフトクリームになり
巣に持ち帰られ食べられて蟻になる
やがて蜘蛛に食べられ蜥蜴に食べられ鳥に食べられ

食べられ続け人間になる

それから

ベンチの上で固まり続ける

今日木を植える

冷え切った食卓では
幸福の亡霊がさめざめ泣いている

もう少し気のきいた言葉を並べるべきだわ！
ヒステリックなママの声に醤油差しは怯え
少しだけ醤油を漏らした

愛してるよ、パパ
けれどママが作るアップルパイはわたしの嫌いなシナモンの匂いた
っぷりだから
思わずパパの顔に投げつけたくなるの
愛してるよ、ママ
けれど時々ママの体のお肉をミートパイにしてしまう夢をみるの

じわじわと貴女に狂気を植えたのは誰かしら
それはパパだったのかもしれないしわたしだったのかもしれない
それはあいつだったのかもしれないしママ自身だったのかもしれない
そしてそれは誰でもなかったのかもしれない
（ママに効くお薬が見つからないの！）

暖かい食卓を望んでいたのはママだけじゃないわ
あの時頑張っていたのはパパだけじゃないわ
あの時ひとりぼっちだったのはわたしだけじゃないわ
（ママに効く言葉が見つからないの！）

ずるいのよ

一人だけ
そんな風になるなんて

だけどその方が生きてゆけるものね
そうでないととても生きてはゆけないもの

戻さないで
戻らないで
そのまま

正気に戻ったらきっと
たちまちママは死んでしまうわ

エレクトリカル葬儀

遠い遠い遠い親戚のおじさんの訃報が届いた

葉書には
『着ぐるみ着用で来られたし
特殊メイクでも可』
と書かれていた

長い長い長い道のりを揺られたどり着くと
二番煎じ、いや三番煎じ程の崩れたキャラクター達が鎮座している

皆の表情はわからない
それ以前に誰なのかさえ

淡々と鳴り続ける木魚だけが正しいもののような顔をしていた

滞りなく全てが終わると
揃って近所を一周練り歩いた
音楽も無しに

永い永い永い別れを告げた後
フランケンシュタインのメイクをした子供が唐突に、それでいて当
たり前のように明日の話を始める

皆、酒は一滴も飲まなかった

まみれた日

昼過ぎ目覚めたら僕は真っ白だった
シャワーを浴びようとしたら十二時から断水らしい
窓から見える隣の芝生は今日も青い
小さな池は溢れんばかりだ

隣の奥さんが庭に水をまく
ミネラルウォーターの水をまく
倒れたペットボトルから零れ出したものが
土の上に見たこともない国の地図を作っている
真っ赤なピンヒールがそれをぐしゃり

傍らに腰掛ける旦那さんは
さっきからずっと右足を小刻みに動かしている
苛立っているのか何かリズムを刻んでいるのか
ここからでは推し量ることは出来なかった

隣の家の長女は学校に行くふりをして
よく僕の家へこっそりやって来て時間を潰す

何をするでもない
転がっている

彼女は絞った形のまんま
からからに乾いた布巾みたいに転がっているのだ

窓辺の植物達を見やる

乾いている
渇いている
本当に水が必要なのは
一体誰なのだろう

もう反発しなくなった枕がベッドが
僕の形を保って戻らぬまま
ぽっかり沈み込んでいた

次女は年中ウエスタンブーツだった
腰につけていた銃は本物だったらしい
だから連れて行かれてしまった

僕はまみれていたから
何かの上を歩いていたよ
あの子も居なくなっちゃったし
思い切って隣の池に飛び込んでみた

小さな池に底はなかった

それから
瞬間見えた青い芝生は
人工芝だったよ

からだ

わたしは
にのうでと
ふとももで
勝負した
ちぶさは
使わなかった

あなたは
のどぼとけと
ひげで
勝負した
せなかは
使わなかった

わたしたちは
それぞれを
それぞれに使いながら
日々を過ごした

そのせなかに
おぶさりたいと
強く
思ってしまった日や
そのちぶさに
めでられたいと
強く
思ってしまった日は

向かい合って
さめざめと泣いた

そこは
海ではなかった
湖でもなかった
みずたまりを
たゆたうように
ふれる手を
わたしは
いつまでも
甘噛みしたくなって
歯をすべて
ぬいてしまう夢を
よくみた

まだ犬歯が
とがっていたから
わたしたちは
まちがわずにすんだのかもしれない

ごつごつした
あなたのからだを
つまさきから
あるいは
つむじから
一晩中さわっていると
わたしは
一山越えたような

きぶんになって
どうにもよわった

ちがうものと
おなじものが
しっくりと
かみあわないから
わたしたちは
ただされていくしかない

あなたが
わたしのからだを
つむじから
あるいは
つまさきから
一晩中さわると
波の音が
とおくとおくから
きこえるきがして
どうにもなみだを
こらえたくなる

丘の上で

ある日彼の頭が大きくなっていた
正確には髪、が
複雑に絡まり生い茂るアフロを深い緑色に染めて
彼は木として残りの時間をあの小高い丘で過ごすことに決めたのだ

いつまでも景色に馴染まないままやがて枯れていくだろう
そうやって枯れていくのだろう

ティッシュにくるんだビスケットくれた
ビスケットよりもティッシュにくるんだ彼の気持ちがとても愛しかった

あの頂のマロングラッセをいつか半分こしよう
延長コードで繋がろう
君を、
君を美しいものにしよう
わざと子供の声で歌えばいいの

毎週日曜日、私は屋根に登り、七色の全身タイツを着て、ブリッジをするよ
何度となく警察に連行されながら

そこから見えるかしら
定期的に現れる虹なんて素敵でしょう？

＊

ある日姉ちゃんの腕が伸びていた
正確には接ぎ木がされていた

足を肩幅以上にどっしりと開き、伸びた腕をぴんと空に向けて
姉ちゃんは電波塔として残りの時間をあの小高い丘で過ごすことに
決めたのだろう

先日姉ちゃんの恋人がようやく骨になったそうだ
あそこには沢山の骨が埋まっていて
新しい骨が増える度に土がかけられ丘は高さを増していく
そうして僕らは離れていくのだと知った

特別じゃないものが特別になる瞬間があったね
あなたを色付きのティッシュでくるむよ
どうか許して下さい

翌日
大きな大きな薄緑のマントを買った

毎週日曜日、僕は屋根に登り、それをはためかせ、オーロラになる
つもりだ

円

陽気な処だからきっと大丈夫よね、と言って
国産よりも安いブラジル産の鶏肉をかごに入れる妻の横顔は春だ

お前は世界をどれくらい知っているのか
野菜コーナーから冷食コーナーまでがお前の人生なのか

お前は月一で爪切りになる
自分で隠れ、そして
自分で出てくる

いつも穏やかなお前の中も
恐らくキャベツのように複雑に渦巻いているのだろう
世界は小さくとも

日用品コーナーに
しぶとく居座る私を見つけた時のお前の顔が好きだ
此処は離島だよ
時々一緒に来よう
帰りに塩豆大福を買おう

何も見せてやれないまま
今日も陽だけが暮れていく
お前はそれでも笑うのだろう
それでいいと、笑うのだろうな

みちくさ

風の向きを知るために
煙草を吸うのだと言ったおじさんは旅人のような目をしている

私は立ちのぼる紫煙の終わり目から紡ぎだされるその先の世界を知
りたかった

家にはない温かなものを道端で生み出す術を見つけたから
たくさんの道草を食べてお腹をいっぱいにすることだって出来た

日が落ちるまで
原っぱの
花かんむりの
存在を隠し続けて
とても長い道を

家は随分干からびていた
頭をこすりつけて神様に土下座をしていたら
そのまま逆さまになってしまった両親が庭には埋まっている

おじさんは
瞬きをしていた
まるで深く
息をするみたいに

そうして数回シャッターをきった後
プラスチックケースの中へと帰っていったんだっけ

ランドセルを開けば
異国の唄が聞こえてきて
涙が零れて家を潤し
生い茂った草が両親を隠した

その分
干からびていく私は
風向きがかわったことを
知る術がないから

時々段ボールに
入ったりしながら
いつか太陽にさらされ
許される日を
静かに
待っている

旋律

7時４５分きっかり！お煎餅を割るような軽快なラジオ体操のリズムからやがてじゃぐじゃぐと咀嚼されてゆくおどろおどろしい音へと変貌！したところで太陽をマフラーで隠す男の子！をマフラーで隠す女の子！

（光で色んなものを隠していく
それでも髪をとかし味噌汁をすするだろう）

毎夜片足だけ逃げてゆく女の子の靴下！の余った方はクリスマスを待ちわびている！がそれを容赦なく引き裂く男の子！

（幸せになるんだと暗示をかける
そして今日も平和だと勘違いをして）

7時４５分きっかり！にしか排泄出来ない神経質な男の子！はいつも決まって遅刻する！が最早それも計算の内！

キッチンに住む

巨大な食器棚の威圧感なのかそれとも中にいる父のものなのか
それはただ無言で閉じたり開いたりしている

圧倒されながら私は少しばかりの抵抗にぐいっと腕まくりをして
まな板の上で残虐の限りを尽くす

包丁はいつだって私の代弁者だった

母に染み付いたアルコールの匂いと
キッチンに漂う諸々の匂いが喧嘩をしている
母が最後に発した言葉は何だったろう
（あの安い赤ワインはビーフシチューになるはずだったのに）

度々私は夜中に吐く癖があったけれど
汚いものはどこだか知らない所へ流れていく仕組みだったから誰も
何も言わなかった
（　　）

キッチン、と呼ぶには大分くたびれた台所を丹念に掃除していると
時々思い出したように父が「あんまりピカピカに磨くなよ」と言う

コンロは舌打ちを繰り返し、なかなか言うことを聞かなくなって
油の馴染んだ壁は前より穏やかな表情になった
みんな順調に汚れていく

「台所ってのはそういうもんだ」って言う

正確に計量する事で
ここが正しい場所になると信じ込んだ
目分量をなめていた私は既になめられていたのだ
（適宜適宜適宜！）
（その適宜がわからない！）

換気扇から流れていく匂いにこっそりＳＯＳを込めてみる
しかしそれは誰かの鼻をくすぐり
ただ家路を急がせるだけだった

冷蔵庫は今日もほど良く私達に冷たい

da

傍らのサボテンが体中の水分を奪っていくのがわかった
それは時々思い出したように泣くので
私は嘆いてみたり哀しんでみたりで

消臭剤の減りが早い
部屋中の生気までも吸い込んでいるのか
彼が溶け出してしまった日に
飾った花は半日で枯れた

欠けた月、満ちるまで
ミルクを温める時間が必要だと思う
（それを飲んだとしても
　眠れる保証などないし
　眠れた試しもない）

化粧水がいつもよりも浸透しにくい
冬が冬が
近づいているのだ

ぐにゃり、
揺れるコンクリート
彼は蜃気楼を着込んだ

この距離はただずっと平坦に保たれていく
そして私を保っていく

間違った握り方の鉛筆で
狂ったようにデッサンを
パンは零して構わない
いずれ鳥が食べるだろう

きっとあなたの心臓は思った以上に速く脈打っていたのだと思う
あれ以来私の鼓動が速くなってしまったのと同じに

その後ろ姿は滑らかで
絵画に収まってしまいそうだ
まるで美術室の隅に置き去りにされたみたいな皮膚

もっと助骨に触れておけばよかった

（あなたが母よと慕うなら、私は母にもなっただろう
父にはなれなくとも）

ぱしゃり、
跳ねた水たまり
霞いる声
「明日で待ってる」
そう残して同化してった
（つまり私達は、もう、
　永遠に、）

また零時が来る
近づいて遠ざかる

あれは綿毛か彼の髪か
傍らに花は咲いたか

（明日のなんと、
遠いこと）

どうしても
思い出せない
ピカソになった
あなたの顔を

思い出せない
どうしても
（春の背中は寂しげだ）

冬場の話

家に帰ったらとにかくすぐに家中の電気をつけるの
明るいっていうだけで暖かいような気がするもの
特に冬場はね

わたしを待っているのはいつも一膳のご飯だけ
昨日は緑のふりかけだったから今日は黄色ね
時間の経ったお茶碗の中には何が詰まってるっていうの
これだからラップの水滴は嫌いなのよ

冷蔵庫を開けると見たこともないメーカーのチョコレートがまた増えてる
（今日は勝ったのかしら
パチンコの景品ってなんだか宇宙みたい）

母はいつからわたしの前で煙草を吸うようになったんだっけ
そうだ、ある時わたし言ったんだった
もう知ってるんだから隠れて吸わなくてもいいよって
（だからってそんなに堂々と当たり前のように吸わないでよ！）
罪悪感とかあったのかしら？
許したらそれで終わりなのね

冷めきったご飯は凶器よ
ごくりと飲み込んだ時のあの冷たさ
特に冬場はね

炊きたてのと冷めたのって同じ釜で炊いたのに全くの別物なんじゃ

ないかってこの時ばかりは疑ってしまうわ
そうよ！冷えきってるのは茶碗の中だけじゃないわ！
同じ屋根の下にいるのよ？わたし達
（でもねたまに冷めた米粒が人に見える時があるの
密集してててゴロンとしてまとまりたがっててなんだか地球みたいで
ほんの少しホッとする）

ご馳走様したら明日の為にご飯を炊きましょうね
少し柔らかめに炊きましょうね
（この湯気をあげたかった
父に母に、勿論兄にも）

ねぇわたし達もっと愛し合えるかしら？愛し合えるのかしら？
ねぇわたしは青いふりかけを探してもいいのかしら？

潮時

開かれた鯵は
日を浴び風にさらされ
乾いていく事で
新たな生を受け取っている

実家から送られてくる蜜柑は
いつだってすぐに腐っていった
もぎ取られた瞬間に生は終わるのか
どこでそれは途切れるのだろう

よし子、よし子、
あんまり雑草を抜き過ぎらんでくれ
そうだ
なぁ、よし子、
庭に木を植えよう
緑は優しいからなぁ？
なぁ、よし子、
木を、木を植えよう
（おじいちゃん、わたし
よし子じゃないわ）

ふっ、と綿毛を飛ばして
ここで二人
静かに生き直す
（残った僅かな思い出を

洗濯バサミに挟んだら
風通しの良い日陰に吊そう
幾分か日持ちするように）

あなたがわたしを忘れた日を
わたしはよく覚えている、覚えている、覚えていくね

夏に負ける

もぎたての胡瓜の鋭さに閉口した
最近反抗期をむかえた弟によく似ている

ぽんぽんと散々叩かれてようやくわが家へやって来た西瓜は
ここでもまた順繰りに叩かれた
西瓜は終始無言だったが弟にだけ「入ってます」と応え
しばらく彼らは見つめ合い互いに心を許しあった

＊

際限なく麦茶を沸かし続ける祖母は
夏の大半を台所で過ごす
半分溶けているが気にしている様子はない
肌着がぽつんと落ちている

＊

母が茗荷を刻み始めると向日葵が一斉にそちらを向く
わさびを下ろしそうめんをしめながら
合間にせっせと祖母の半分を冷凍庫へ入れる
夏のものかそれとも夏以外のものだろうか
その横顔には疲れが滲んでいる
母は朝顔が好きだった

＊

誰にも優しくできない父は地球に優しくしていた

そうして夏の間中
扇風機に生気を吸い取られ続けた
いつまでも不器用だった

＊

毎年花火を見損ねる
何も履かずに飛び出せば間に合うのだとわかっていても、

＊

夏の終わり頃
弟は冬瓜に心変わりしたようだった
冬までもつだろうか
あの胡瓜の瑞々しさを羨ましく思う

スイッチ

酷く温かいものに溺れたくなったので
うねる渦と共に回ってみたのです

ごうんごうんと回る洗濯機の中は
決してメリーゴーランドではなかったのだけど
あのオルゴールくらいにならなれる気がしたのです

遅すぎたと言い早すぎたとも言い
もうやめたと投げ出すわりに
手の届く範囲に留めていたりして

もっとうんと遠くへ投げればいいのにと
誰でもない誰かが自分ではない自分に呟いていました

回っていたら
生暖かい風が頬に触れて
それがとても君に似ていたので
ごうごうと加速してみたのです

干しっぱなしのタオルが飛んでいってしまって

少年のアイスクリームが一つ落ちてしまって

シルクハットの中からはやっぱり何にも出なくって

僕は
何度も握り直した手を

何度も眺めて
何度も洗ってみたけれど

これはもう
洗っても洗っても落ちないのだと
気付いたのです

だから
絵を描こうと思いました

出来るだけ原色で
絵を描こうと思いました

スイッチ？

酷く温かいものに溺れたくなったので
コトコトと囁くスープの中に浸ってみたのです

全てが蒸発してゆくようでした

いつまでもそうしている内にすっかり煮詰まってしまって
限界を越えたじゃがいもはくたりと煮崩れてしまって

網戸越しの古いデジタル画面の世界では
とてもポップな音がしていたので僕は飛び出しました

ぐらぐらでぐるぐるな視界は
ジェットコースターのようで
父のゆりかごのようで
焦点が合わなくて思わず目を瞑りました

皆一様にさよならばかりを置いてゆきます

最後にジジジ、という悲しい音を残して
君の声も途切れてしまいました

黒い服を着た人の列と
白い服を着た人の列と
僕はどちらにも並びませんでした

こうしてまた
呆気なく先頭を見失ってゆくのです

流れに乗ろうと思い立ち
夏にためたアイスの棒でイカダを作り始めました

僕は日々進化します
けれど同じ位の速度で
日々劣化してゆきます

僕もいつかは此処にさよならを
置いて行かねばなりません

鳩を飼う

ここいらでは腹の中に鳩を飼う習慣がある
鳩を死なせた者には重い罰が下るので
皆、甲斐甲斐しく世話をし可愛がるのだった
やがて鳩が立派に成長したとしても、飛び立つ事はないだろう
大事に、ただ大事に抱えて過ごすだけなのだ

神様がハンバーガーからするりと綺麗に抜き取ったピクルスを
死神様が食べてあげている
そうやって成り立つ毎日だった

私は鳩をあまり可愛がらなかった
時折クルルと切なげに鳴く鳩がとても煩わしく、そしてとても愛おしくも思える日は
ぎゅうっと皮膚をつねってしのいだ

世話を怠けていたら、いつの間にか私の腹から逃げてしまっていた
追いかけなくても良い気がしたけれど
母が急かすものだから渋々探しに出かけることにした

鳩を見ませんでしたか？
歩きながら尋ねて回った
しかし誰も首を縦に振ることはなかった

よくよく考えてみると私は鳩の姿を知らない
生まれた時から腹の中にいるが一度も見たことがない

きっと誰も知らないのだ
その姿を

もう何を探しにきたのかもわからなくなっていた

森の中で一匹の狼に出会った
腹に石を詰められて大変なんだと嘆いている
鳩の事を訊ねると
そう、その鳩を喰っちまって神様に石を詰められてよ、と言った後
いやあ格別に旨かったんだがね、と付け加えた

ぽっかり空いた腹のままでは母に怒られてしまう
危惧した私は代わりに石を貰う事にした

傍らで揺らぐ湖にうつる空には鳩が（私の想像上の）鳩が
目一杯飛び交っている

皆の腹から一斉に飛び立つ姿を思い描いては打ち消した

月を掬えないように
彼等もまた両の手を器用に滑り落ちるのだった

家へ帰った私は何事もなかったような顔をしてみせて
その日からこっそり裏庭に穴を掘り始めた
ひたすらに掘り続けた
深く深い穴を

（（私、鳩よりも大切にしたいものがあるの！））

いつの日かそう叫ぶために

神様が死神様の分のガムシロップを
当たり前のように自分のアイスコーヒーに入れている
死神様はブラックで神様は甘党なのだからそれでいいのだろう
そうやって処理されていく毎日だった

あの時の湖に
私は石共々沈んだ方がよかったのかもしれない

のぼる

月を見つめているとお腹いっぱいになる
あれはバタークッキーだよと教えてくれた幼なじみは
自由に空の色を変えられた

工場長の目を盗んで書いた手紙は
いつも届かないまま何処かへいってしまう

ご飯粒で貼り付けたものだから
言葉達は途中でからからに乾いてしまったのかもしれない
それとも鳥につつかれたのかな
それはそれで構わないのだけれど

＊

定時に帰路につく
倉庫裏で重なり山積みになっていく同僚達に会釈をして
その後はもう泥のように眠るだけだ

休日は昔君に貰った虫眼鏡で蟻を見ているよ
時々彼らをくっしゃり踏み潰したくなる日があるよ
ぐっとこらえて
虫眼鏡で時間を潰すようにしているよ

＊

年に一度自転車で帰る故郷が
だんだんと遠くなっていく気がする

あと三年もしたら
きっとたどり着けなくなるだろう

今は遠く離れている恋人が
いつかベルトコンベアから流れてきたらプロポーズしようと思う
そんな日が来ないこと
わかっていても

君も結婚式には来ておくれ

＊

月の濃い晩だった
すっかり満ちた体
油を含んだ髪はもうなびかない

月の濃い晩だった
積み重ねられた同僚達によじ登り
月を頬張る夢を見た
最後に相応しい味がした

＊

翌朝、虫眼鏡が鼻眼鏡になっていた

それをかけたら少しだけ陽気になった

だから大丈夫だ

＊

動かなくなった僕を
工場長が倉庫裏へずるりと引きずり、積み重ねていく
この上にもまた誰かが重なり続けるのだ

さようならは届かないといい

内在の子

いつからか私の中のコップはいつも腹八分目でご馳走様をする
手は口よりもお喋りになり私を困らせてばかり

四つ葉のクローバーを見つけられなかった少女は
三つ葉のクローバーをごっそり持ち帰り
小さな小さな幸福を少しずつ頬張る
思いは溢れかえっていたけれど、何一つ言葉にならなかった

あの時飲み込んだ西瓜の種がめきめきと成長しだしたようで
手垢のついた幼少期に死んでしまった少女は
私が大人になってからひょっこり顔を出したのだ
（白いワンピースの似合う女の子になりたかった）
（ソフトクリームを上手に食べられるようになったら一緒に連れて行ってあげるよ、と言った犬はいつまでたっても来なかったじゃない）

踏み固められなかった地盤は黒糖のよう
すぐに蟻が食い潰して

表と裏の距離が離れる度
憎しみは濃くなってしまったし３０回噛んでもなくならなかった
ぎゅうっと１２０分に凝縮してみてもキュルキュルと巻き戻すことは叶わない
誰かの目に触れることも
（あの日あの時救わなければ）

消え去ったわけじゃなく

隠れているだけだった
昼間のお月様みたいに
（少しの優しさと沢山の嘘が編み込まれたマフラーは
それでもやっぱり暖かいからぐるぐると巻いてしまうよ）

少女はいつまでも少女のままだけれど
私はまだ成長することを許されているのだから

少女が飲み込んだ
「あのね」や「なんで」を私がいつか口にする時
私達の縫い目がなくなる時
そしたら産声よりも大きな声でこの子が泣いて叫んで喚いてくれたらいい

そうして一枚捲れた世界でどうかもう一度
四つ葉のクローバーを探して欲しい

夏休み

押し入れの奥から思い出の詰まったクッキーの缶を引っぱり出して
そうっと開けてみる三十一日
あなたはすっかりその中に入っているんだと思っていたんだけれど、

どこにもいなかった
まだ思い出にはなっていなかった

夏休みにしか会えない人がいるとして
夏休みにすら会えない人がいるとしたら
きっとあなたのような人なんだろう

褪せたTシャツを
ほつれた制服を
私は今よりずっと大切にするかもしれない

あの入道雲の向こう側へ行きたいなんて
もう思わないけれど

夏休みにしか会えない人がいるとしたら
きっとあなたのような人なんだろう

白昼夢

もう数えられるのはいやなのと羊は吐き捨て出ていった
夢なんかよりもっと美味しいものが食べたいわと貘はぼやいて出ていった

真っ暗な真っ暗な部屋の隅に座っている
櫛形のレモンを左手にフォークを右手に

夜は大きな口を開けて鋭い目をしてやってくる
だからレモンで目つぶしをしてフォークで虫歯をつついてやるんだ
なんて息巻いていたんだけれど
夜はちゃんと足音をたてて近づいて来てくれて
あたしを驚かせないように一つ小さな咳払いをしてから
そうやってずっと一睡もせずに、お前はどこを一日の始まりにするんだい？って問いかけた

ちらりと見えた夜はわずかに内股で

あたしと夜は一定の距離を保ったまんま
少しずつ少しずつ互いの時間を重ねていった
両手の中のものを持て余しながら

朝や昼に恋い焦がれた時もあった
けれどあたしは必ず夜に帰り着いた
もう少しだけ寄り添えばいいのだとしたら
きっとさよならを口にしてしまうだろう

いっそ、
いっそさっぱりとさせたかった
これ以上近づきすぎるのを抑えたくて
思わずあたし達の間にレモンをぎゅうと搾り放り投げた

夜は所在なさげに転がるレモンを手にとり暗闇に浮かべる
するとそれはそれは素晴らしい三日月になった

それから夜は静かに言った
そのフォークで私に穴を空けなさい、沢山沢山空けなさいと
あたしは戸惑いながらもぷすりぷすりと空けてゆく
するとそれはそれは美しい星空になった

夜はおもむろに右手からフォークを奪うと
お皿の上のパスタみたいにあたしをくるくる絡めとり踊らせ始めた
円を描きながら
時々跳ねながら踊らされた
ううん、あたしは既に踊っていたんだと思う

（お前はもうすぐ気付くだろう
朝も、昼も、夜も、同じ私だということに）

一頻り踊り終えた後
あたしは貘が残していった夢を急いで食べた

朝になったら
『羊は狼にではなく観光客に食べられてしまった』という最悪のシナリオを書き直そうと

フォークを鉛筆に持ちかえた

秋の夕

終わりかけの夏と溶け出しそうな今日を
急いで冷蔵庫へ入れようとしたけれど
そこには沢山の冷え切った昨日がぎゅうぎゅうに詰まっていた

何度か開け閉めしてようやく今日を諦め
冷凍庫で眠る三年前の干物とあの日の決意を見なかった事にし、錆びた包丁を握る

空の鍋は全てを受け入れる態勢にあるというのに

切れ味の良い包丁と
歯切れの良い言葉は
今も使いこなせない

土鍋からしゅんしゅんとふき出す蒸気が
タイルの壁にうつるのを見ていたら
無性に絵が描きたくなった
押し入れを漁り、絵筆を手にとってみたものの
私は絵など描けないのだったと今更ながら気づいて立ちすくむ

土鍋の中の栗ご飯はすっかり焦げていた

秋を通り越したおでんの具材達が
「いい湯加減だよ」と誘ってくる
「でもちょっと塩分が足りないね」そう重ねて言うので
二三泣いてやったら大人しくなった

外の風をあたりに出ると
近所の子供達がどこからともなく現れては消えていく
無邪気に走り回る足跡にそっと種を蒔いた
きっとよく育つだろう

羨望と希望とを綯い交ぜにした土をかぶせて
また少し手を汚す私の影は
そこはかとなく薄くみえた

夕闇の中木霊する子供達の笑い声を
ジップロックで捕まえて持ち帰る

眠る前
部屋に放つのだ

これを子守歌にすると
明日もどうにか生きていける気がする

ふんでいく

横たわるあなたの
ゆるく編まれた
三つ編みの階段を上る

鼻先を滑り降り
唇に新しい呼吸を与え
そして与えてもらう

右手に
ヒヨコらを放ち
幾ばくかの
母性を養い

左手に
それぞれの世界の
ポストをたて

夜毎
心許ない谷間で
語り合う

人差し指はしっかりと
未だ来ない
手紙の行方を示したまま

（許して）
（許さないで）

くしゃみをする度に
ずれていく骨盤の
その衝撃を
のみ込む事はしなかった

必死で乳房に
しがみついて
みせるのだけど

おへその中で眠るには
もう
大きくなりすぎて

月に一度
ふつふつとたぎる溶岩が
両足の間を
流れる

黒く冷えた後を
渡ろうとする
私のいやらしさを
見抜いた舌は
また一つ嘘をつく

（許さないで）
（許さないで）

私が遮ってしまった
沢山の手紙へ

そっと火をたく
背中は見せないまま

かわってしまう
質感の皮膚
それを犠牲と
呼ばないでくれて

（ありがとう）
（ごめんなさい）

丸々と太った鶏が
ローストチキンになり
あなたになり
その足を動かす時
世界は骨盤よりもずれて

戻らない時間が
あなたの形を
確かなものにする

託された手紙と
僅かな卵を鞄に詰め
溜め込んだ爪をあわせて
私はいよいよ
小舟を作り出すのだ

たとえ
かえっても
かえらなくても

ぴんと立った
つま先から
落っこちる日を
少しだけ
夢みている、
ほんの少しだけ

いつかは
あなたのなで肩に
帰りたい

春を忘れる

春など待たない
今日が始まるのを
今日が終わるのを
ただ待っている

＊

萎れていく祖父の背中をさする
水をあげれば元気になる、私達そんな風にもう少しだけ単純な仕組
みならよかった

どこか遠い国の恋人達が
毎日「愛してるよ」と交わし合うように
毎日「生きていていいよ」と言う

発せられる言葉の切れ端から
その表情のどこを読み取れば心のなにを汲み取ればいいのか
皺の動きに眼を凝らし
バケツを強く握り締めている

私の名前は何でしたか
質問はもうやめにしましょう

＊

祖父の手はチラシの赤いところだけを延々と紅葉の形に切り抜いて

いる
私はそれを黙って障子の破れた箇所に貼り付ける
（破れていない箇所にも）
また秋が巡ってくる
この部屋には秋ばかりが

消しても消しても一日中ついている灯りが
朝を無くし夜を無くし時計を無意味にした

庭先に干しっぱなしのハンカチ
干からび、潤い、
また干からび
少しずつ着実に汚れていく
その事だけが私達を流してくれた

並行して昔の話が繰り返される
それは祖父にとっての今だ
ここに居てここに居ない

私が涙を零しても
染み込むことなく行き場をなくすのだろう

＊

すべての希望を春に託した

そしてそのまま忘れるつもりだ

真夜中に銃を持つ

不精髭の群生する庭
双子のスリッパはお行儀良く
いつまでも主人の帰りを待っている

夜が深くなると
私は灯りのついた場所を探し回り
コンビニに駆け込む

そうしてインスタントの人形にお湯を注いでもらい
少しの安堵感を得て
使わないマスカラを一本買って帰るのだ

目も合わさずに太陽は呆気なく沈み
また何処か別の場所を照らしに行くという
、いつも裏側に嫉妬して

夜は昔私の味方だったのだと教えてくれる者はもういないし
星々はただ見つめるだけで何も語る事はない
、見つめてすらいないのかもしれない

不精髭を刈ってやると
庭は五才ほど若返った

壁に貼り付けられた押し花は老いる事を許されないまま

前髪を切ろうかどうしようかって

悩んでるみたいにもうずっと生きている
、それはあの日から変わっていない

無邪気なスリッパにご褒美のキスをすると
引き出しがカタカタ震え出す

呼んでいるのは
私の方なのか

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0857z/

スーベニア

2011年12月9日00時47分発行